

きものの流れ

神の時代から

我が国には「神代」と云う時代があります。これは明治の教育がでっち上げた一つの物語であるという学者もいますし、「古事記」も信憑性を疑われています。けれど、きものを研究する上では「神代」の物語というものはどうしても必要なものでございます。

御存知の通り神様はたくさんあります。その中で、日本の国造りをなされた神が、イザナギ、イザナミの御夫婦の神様です。国造りを終え、多くの神々を生むのですが、ヒノヤギハヤオの神を生んだ時、イザナミの神は病気になるって死んでしまう。このヒノヤギハヤオの神は「火」の神だったので「みほと」が焼けてしまったわけです。

イザナミの命が死んでしまっても忘れられないイザナギは、イザナミに会おうと黄泉の国へ追っかけてゆきました。イザナミは「もっと早く来てくだされば良かったのに、もう亡者の食物を食べてしまったから黄泉の国の人間になってしまいました。けれど還ろうと思えますから、覗いてはいけませんよ」と云って部屋の中へ入ってしまう。それにも関わらず恐いものは見たいから、旦那様が一寸覗いてみると、イザナミの休には蛆虫がわいてすでに亡者になっている。「これはいかん」と云ったかどうか、大急ぎで逃げ還ろうとしているところへイザナミが出て来て、「私に辱をかかせて」と、黄泉の国の悪霊や鬼を使ってイザナギを追っかけさせたんですね。

どんどん逃げて逃げて、黄泉の国境に来た。けれどまだ追っかけて来る。丁度そこになっていた桃の実を三つなげつけたら、鬼たちは皆退散したという、これは神代の物語なんですよ。

今の世の中には一寸通じないけれども、この後のお話に、きものと関係する事柄が現われて来る。

黄泉の国へ行って身がけがれたイザナギは、笠紫の日向の橘の小門の阿波岐原でみそぎをします。その時に、杖や帯、冠、禪、着物などを海に投げ捨てます。

神代の時代既にきものがあったということ、針も使っていたということが察せられる。といひましても、この「古事記」が成立したのは712年、神代の時代からはかなりの時が経ってはいますが。

話は変りまして、皆さん御存知の耶馬台国のことになります。この当時のことと云いますと、2、3世紀の頃になります。記録は日本書紀や古事記ではなく、中国の正史の、倭伝に残っているわけです。その中でも一番古い記録と云われているのが「魏志倭人伝」。その中に、「其の風俗淫ならず。男子は皆露かいし、木懸を以て頭に招け、其の衣は横幅、およそ結束して相連ね、ほぼ縫うこと無し。婦人は被髪屈かいし、衣を作ること單被の如く、其の中央を穿ち、頭を貫きて之を衣る(其風俗不淫、男子皆露かい、以木懸招頭、其衣横幅、但結束相連、略無縫、婦人被髪屈かい、作衣如單被、穿其中央、貫頭衣之。)」とあって、裁縫を施さない粗末なものを着ている。男は体に巻きつける袈裟状のもの、女子は中央に穴をあけた貫頭衣を着ていたという記録が残っているわけです。

ところで、景初3年(中国明帝の年号で、239年)に女王卑弥呼が明帝に使いを出して、男4人と女6人の奴隷を献じ、一緒に斑布二匹二丈も贈り物しています。その翌年にお返しとして中国の皇帝はたくさんの織物や宝物と一緒に、金の印綬を女王に贈り、倭王を名乗ることを許しています。

さてこの印綬はその後1500年以上たった、徳川時代の中期ですか、お百姓さんが、自分の田の水はけが悪いために、その溝を直しておた。二、三枚の石をどかすと、不思議にもそこに純金の印綬が出たんですね。それが天明4年(1784)のことですから、随分長い間地の中に埋っていたわけです。

卑弥呼はその後、正始4年(243)にも、「生口(どれい)・倭錦(にしき)・絳青ケン(赤や青の絹)・懸衣・帛布」などを中国の皇帝に献上しています。ということは、その時代にも立派な織物が日本で作られていたことになる。どんな織物かは想像するだけで、はっきりしたことは解りませんが、中国の正史の魏志倭人伝に記録されているから作られていたことはまず間違いのない。

中国の正史「魏志倭人伝」には240年前後の事が記されているのですが、それ以前にも日本は中国からの文物を取り入れていきます。朝鮮半島と日本の間にある、済州島には朝鮮半島から大陸の文物が入っていた。日本の文化はずっと遅れていますから、そこへ行って物々交換をして、珍しい物を日本へもってくるということが行われていたわけです。

帰化人ときもの

応神天皇の時代(281年から312年の間天皇位<日本書紀>)になると、朝鮮半島から帰化人がどんどん入ってくる。どうして多くの帰化人が入ったのか。大陸では中国が皇帝制を広めて、自分の国を広げていた。国を推持するためには国を大きくして、その土地から利益をあげなければならない。朝鮮半島はその時どういう状態にあったかといひますと、高句麗、新羅、百済の三国に分かれていた。この三つの国は仲が悪くて、年中戦をしていたといっても良いくらいで、しょっちゅう勢力争いをしていた。それに中国が勢力を拡大してきたから動乱につく動乱ですから、国を捨てて逃げ出す人も大勢になる。手に職を持っている人が、日本にゆけば好遇されることはもうその頃皆知っていたでしょうから、日本へ渡ってくる。

応神天皇の時代になると、同盟関係にあった百済から助けてくれと云ってきたので、日本軍が半島へ出兵します。この時から益々帰化人が多くなります。

百済王が真毛津という女の職人を応神天皇に贈ってきたのはその頃のことです。彼女は「縫衣工女」と云われているから、裁縫

先見の明があったかどうか。その当時中国は戦乱の巷になっていたのです。菅原道真が宇多天皇のご命令通り中国へ渡っていたら、どうなっていたかわからない。先見の明があったのか問が良かったのか行かなかった。その時に、日本のきものが出来たのです。

朝服を基にした種々の衣服が奈良時代から平安の時代までずっと受け継がれて来ていた。この元は胡服の二部式でありますけれども、それを日本的に改良したのがこの時のことだったわけです。菅原道真は学問の神様であります、私に云わせればきもの神様です。中国へ渡らず、今迄渡来したものを、日本流にかみくだいて、日本のものにした。今日私が日本のきもの元だと考える十二単が、初めて平安時代の末期、藤原時代に出来上がったわけです。

男には衣冠束帯という素晴らしいものがある。女には十二単がある。純日本の服装の黎明期の衣裳です。今の小袖につながるものです。

この時代は、貴族文化の時代と云いまして、男が女のように齒を鉄漿で染めて、おはぐろにし、黒の帽子をつけて、化粧して、歌を詠んだり月を見たりして栄耀栄華を極めた時代です。その貴族文化の結晶が十二単であり衣冠束帯の衣裳なわけです。

こういう大きなきもの、五枚襲（がさね）の五衣のきもので、紫宸殿の御所の中へ、貢納物を持った外国の賓客が来た時なんか、公家の娘とか奥さんがお相手をする。舞いを舞ったり、酒肴でおもてなしする時のユニフォーム、それが十二単なんですね。通常は十二単の内、唐衣と裳を取って、上に小袿を着る。

鎌倉時代も平安時代と余り変化がなく、十二単が続いて着られます。

下着の表衣化 - 小袖の成立

さて、室町時代の中期になりますと、御存知の通り大乱が起ります。京の町の今で云えば山名町に山名宗全が本陣をかまえ、東に細川勝元が陣をかまえて争いを起したわけです。市街戦ですから、京都の町は火が消えたようにさびれてしまう。これが応仁の乱（1467年）です。

毎日毎日戦争をするために、神社仏閣、家屋敷ことごとく灰にしてしまったのです。こうなると食糧事情が悪くなるのは当たり前で、天皇からお手当てを貰って暮していた公家は三度の御飯が食べられなくなる。皆、堺やその他食糧事情の良い所へ疎開するはめになるわけです。

京都のお土産で一番多いのが漬物。色々あるでしょう。これはこの大乱のため10年間も戦争したために、貯蔵の利く、持ち歩きの出来る便利な食べ物として「おこうこ」が発展したのだとも云われている。それが連続と続いているわけです。

10年間も続くこの大乱のおかげで、天皇からお手当てが貰えなくなったお公家さん達は、カヤをこわして着物にして着たという位、もうどん底の生活になってしまった。そうしますと、一番下にシャツのかわりに着ていた白の小袖が上衣になってくる。戦争はいつも同じで、この前の大戦の時もそう。一番上の良いものから食糧になってゆく。上から順番に脱いでゆけば最後に下着が残る。その残った下着の小袖が表衣化してくるわけです。

こうして戦さ戦さでお公家さんの力、天皇の力もどんどん無くなって、武家の時代になります。天皇や公家は財力が無いから、昔のままの衣裳生活は維持出来なくなります。裳や袴をつけなくても公の場で通用するようになる。こうして小袖の時代が始まります。

桃山時代に作られた衣服は大変豪華で、徳川時代以上のものが多い。刺繍はしてある、摺箔もこの時代から発達している、箔と刺繍と金銀サンゴまで使った豪華絢爛な衣裳が出来たのが桃山時代です。そして関ヶ原の合戦があって徳川時代に入るわけです。

小袖というのは初めは文字通り、袖口の小さい衣服で、礼服の大袖に対しての言葉でしたが、それが表衣化して来たのは先にも云った通り。十二単が式服化されると同時に、武家の力が大変強くなって、小袖が次第に晴着、公の場でも用いられるようになるわけです。これに打掛や腰巻をつけた立派な形式が出来るのが武家の時代です。

繡箔、摺箔、絞りの技術に続いて、江戸時代になると染色が大いに発展します。皆さん御存知の友禅染。染色に一大革命をもたらした技法が出来る。

さて、室町時代から桃山時代を過ぎて江戸時代になりますと、身巾が狭くなります。それ迄は身巾は非常に広くて、つい丈です。女性は片膝を立てて座る、今から考えれば様の悪い格好をしていたわけですから、反対に身巾が広くなければならなかったとも云えます。それが徳川も元禄時代になると、身巾がつまってお引きずりになって、抜き衣紋をするようになる。女は内股で歩くようになります。お花を活ける、お茶を点てるという時には正座して、身巾が狭いため行儀良くしないとみっともないから女らしくなる。女らしくなったと同時にきもの良さというものが出来たわけです。

徳川時代が過ぎまして、大政奉還によって明治大帝が政治をとられるようになると、世の中が変わって来ます。何が変わったかという舶来というものが入って来る。それ迄はきものを縫うことを裁縫と云いました。ところが外国からミンが入って来て洋服を縫うようになる。洋裁と和裁に裁縫が分かれるわけです。昔は裁縫といえば和裁に決っていたのが、今、裁縫と云うだけでは洋裁か和裁かわからない。それにきもの時には衣更えといって、季節季節で折目正しい節があったのが、洋装になって無くなってしまった。今ある衣更えは、制服を着ている学生さんが役人だけでしょう。

花柳界の折目正しさ

花柳界というものがありません。花柳界の女性ほど折目正しい衣服をしていた人たちはないですね。ついこの間まで、私は花柳

界の人達の仕事をしていたからわかる。私の人生の%はそういう生活で来ましたからね。昔の料理屋の仲居さん、あるいは芸者、いやしくなってお女郎さん、遊女にいたるまで、四季の折目がものすごく正しいのです。

一つの例をあげれば、芸者などとあなどりますけど、一番初めは仕込、そして半玉になり一本になって、ねえさんになり、看板がけになって一人前の芸者になる。五階級ある。五階級のきものは話したらきりがない程細かいものです。それに、暑かろうが寒かろうが 月 日になれば、着ても着なくても仕立替えをします。今の人みたいに、きものを一度縫うと、洗張りも何もしないで、10年も20年もおいておくようなことはない。そんなことするから、もう洗張屋は無くなってしまったのですね、仕立替えする人が居ないから。

昔の人はきものを着ようが着なかつたが、一年たったら全部縫い直すのが日本のきものなのです。まして花柳界のきものというのは、暑い八月に全部ほどいて洗張りをして、10月1日には、着ても着なくても座敷に全部つんで衣更えした。

折目が正しいのです。暑いからね、まだ3日位ゆかたで良い、なんていうのは素人はありますが、芸者は暑かろうが寒かろうが10月1日になると、下に裕の長襦袢を着て、裕の帯を締めていた。ごく寒くなったからといっても、お客様の前に出る時には、重ね着のぬくぬくとしたものは昔の芸者は絶対着ません。

小さい12~3歳の時から仕込まれる。歩き方が悪ければ、こうもり傘でたたかれるという様な、歩くこと迄年季を込められたんですから、作法というものはものすごい。きものに対する折目は正しかったものです。

私は芳町と新橋の芸者さんの良い得意を沢山持ってまして、新宿に昭和3年頃世帯持ってた。お座敷がかかってお座敷へ出るのに「親方一寸来てくれ」とお呼びがかかる。急いで行ってみると、江戸襦を着てる芸者が「一寸見てちょうだい」。見ると長襦袢の衿の繰越しが少ない、とシワが出来る。なぜシワが出来るかと云うと、きものと長襦袢との接合が悪いからです。長襦袢にも勿論繰越しはつけるのですが、長襦袢ときもの生地合う合わないで、シワが出来るかうまく納まるかが決まる。また長襦袢の肩に入れる繰越しを付けなければ、ちゃんと重なることもある。そういう苦労も花柳界の仕事をしてるとわかります。

一段格が下ってお女郎さん。吉原とか洲崎とか千住、品川、板橋とかにあった。そこも折目正しい、きもの移り変りには、お女郎さんは金でしばられているから、廊主と云って女郎屋の主人が指図して、時季~の移り変りのきものを着るのです。娼妓になった年は一年間ピンクの襦子の衿を掛ける。打掛に一目オトシで、これを「掛け」と云います。初見世で、初めて堅気から女郎になった人はピンクの衿を1年かけると、今度は黒襦子に変わります。黒襦子を3年掛けると今度は紫に変わります。紫はお部屋のこやしと云って、一番すれっからしの女郎なのです。

この様に昔の衣裳は千差万別ありました。

明治33年に三井呉服店が三越になりました。その時に今のライオンのある建物が建ったわけです。私が仕立屋へ小僧にいったのが大正4年ですから、その数年前です。日本橋が架って開通式があったのが明治45年の5月です。私が小僧にいった前の年に、東京駅（昔は東京駅と云わず中央駅と云いました）が原っぱの中に出来た。東京駅と万世橋の間の高架工事もその頃やっていました。

三井呉服店が三越百貨店になった時、「今日は三越、明日は歌舞伎」と云った三越の宣伝文がもてはやされた。今は百貨店は皆、互角の力があります。三越でなければという商品は一つもない。高島屋でも松坂屋でも松屋でもどこへ行っても同じわけです。

その時分は天下の三越。ごく良いものは全部三越しかないものだと思って、お客様は三越しか買物に行かなかったのです。

花柳界でも新橋、赤坂の一流の姐さんの出のきものは別染でもって全部三越。それから女学校の制服があります。跡見女学校と、矢羽根の実践女学校。この二つは絶対三越で誂えたものです。

跡見の方は紫に黒がかかった跡見色の、女の子のきものにはもってこいの木綿と紡績の糸を交えた、一寸光のあるきものです。実践女学校の方は、小さい一寸位の矢羽根模様。それが全部三越ですよ、誂えるの。良く縫ったものです。小僧の時分。

大正、戦争前のこと

その頃は女店員も男の店員も全部きものです。男のきもの姿が一番スタイルの良かったのは、株屋の番頭。その次は三越の店員で、第三番目は横浜の商館番頭の和服スタイルです。商館番頭というのは、外人客相手に日本の名品を売る商店の番頭さん。お召しの着流しで、結城の二枚着ぐらい着て、お召しに縫紋がのぞきになって、綴の帯を締めて、それはまあ素晴しかった。

今の東急、昔の白木屋から電車通り越した向側の千代田橋から開運橋寄った方面は全部株屋でした。株屋さんのごく良い番頭になると、一つ胸裏で通し裏になっている。裾だけ焦茶で雲形に染めてあって、胸裏は真白なのです。随分ぜいたくなものを着ていました。それと男物でも付比翼。あの時分はシャツの良いのが無かったから、胸着を着たり、長襦袢を着たりした。その衿が二重衿なんですね。片一方が黒の琥珀とか八丈になっていて、片方が更紗羽二重なんかにしている。両方使えるという二重衿を男がやっていた。

大正時代は職人の腕の良いのがまだ沢山のこってました。紺屋にしてもその通り、刺繍屋にしてもその通り。三越は職人の中の職人という様な素晴らしい腕でなければ務まらない。職方になれなかったのです。今の八重洲口通りが昔は北横町で、そこには一流の職人たちが集っていた。「京忠」と云って江戸襦専門の染物屋がありました。「伊勢仁」と云って印物を専門に染める染物屋がありました。それから「鳥光」と云って刺繍のものすごい左甚五郎腕の刺繍屋もいた。これは皆三越出入りの職人なのです。こうした職人をかかえて三越は最高のものを作っていたわけなのです。

当時丸帯に20円の正札をつけておいて、2ヶ月も3ヶ月も売れないから、0をひとつ付け加えて200円に直したら、その日の内に売れたという語がある。これは実際本当か嘘かわかりませんが、その位ぜいたくな物が三越では売れたということなのです。

関東大震災(大正12年)の時、私は21で丁雅奉公を卒業したのですが、それから10年位は職人をしなければ和裁の道の達人にはなれない。

京都、大阪、神戸と仕事みんな違う。それであちらに一年、こちらに2年と旅から旅の、食ったり食わなかったりして、人の仕事を盗んで東京へ帰ってくる。漸く世帯を持って和裁屋を始められたわけです。

その当時のきものは、今の人には想像もつかないと思います。お花見の時だけ素裕といって今の現在のきものです。後は桜の花が咲く時でもきものは全部2枚着に決っていた。男物の下着は通しだけれど、女物は胴抜きの下着と云ってとても凝った物で揃えたのです。ですから同じきものでも、今はせいぜい着たところで、きものと長襦袢と帯でしょう。昔は2枚着です。それにパンツをはかず皆お腰です。湯もじと腰巻きと。

昭和7年12月の白木屋百貨店の大火で、女店員に大勢の犠牲車が出ました。女店員は和服で前が広がってしまう。救命の綱を持っていて手で隠すから支え切れなくて、頭が重いから逆さになってスーツと下に落ちて、皆ザクロみたいになってしまったのです。この時からズロースとかパンツをはくようになったと云われます。

レースの袖といいますが、昔の袖で、電車などの吊革につかまると、脇の毛が見えるからそれを隠すために出来たのだと云われています。

戦後のこと

この様にして色々変りました。

いよいよ戦争に突入。物の節約、食物もなくなる。着る物も制限される。戦争が激しくなると、みんなモンペ姿になってしまう。それで終戦を迎えます。

都会の者はものすごい晴着でも訪問着でも、絵羽羽織でもみんな田舎へ持って行って、食べる物と交換して裸の生活になる。戦争はいつでもそうです。筍生活です。それから今日の様な平和な、楽な時代になります。

現在、きものを毎日の生活に着る人は大変少なくなりましたが、絹の消費量はどうなっているか。それが驚くなかれです。戦争前より現在の方が段然多いのです。戦争前の豊かな時代よりはるかに多い。それはどういうことかと云いますと、確かに今は化学繊維が発達して大変多く出回っていますが、昔は昔で、銘仙とかモスリンとか云った中産階級のきものが非常に多く生産されていた。ところが今はそれがありません。安い化学繊維でまかなわれています。絹糸の消費は少なくなって当り前なのにね。絹製品に使う絹の量が増えたからです。絹をぜいたくに使っている。帯にしても訪問着にしても付下げにしても江戸褌にしても、全部絹の量が違います。だから絹の消費量は戦前より増えているのです。昔の尺貫法で云いますと、一反は170~80匁でした、昔は、今そんな軽いものは売れません。大体一反200匁以上のものです。絹製品は目方のあるものに変ったわけです。

この頃変わったことと云えば他にもあります。着付教室の流行。中には疑わしい教室もあります。たった3ヶ月で免状が貰え人に教えられる、教室が開けるなんてね。人にものを教えられるわけがない。やっぱりその道でお金を貰って生活を続けるということは、人より一歩先に進んだ何ものかを持っていなければ成功しません。私は年の順でそれを云わせていただきますが、和裁の道でもそうです。人より半歩でも良い、すぐれたものを持っていなければ商売やっても大成しません。

機械の発達とコンピューターの利用もすごい。大島にしても結城にしても、友禅にしてもものすごい生産量になっています。昔は良いものはほんの少ししか出来なかった。今はいくらでも機械で良いものが出来るのです。打掛はコンピューターで出来る。ある会社へ行きますと、人は誰もついていなくて、型を決め、刺繍するのはコンピューター。以前五人位かかって出来たものと比べると、機械の方が上手です。そんな時代になって来たのです。

帯のこと

きものと密接な関係のある帯について話してみたいと思います。

帯の元祖だと云われているのは倭文機帯です。巾が一寸前後、長さが6~7尺ほどで、これを回して結んでいたわけです。

奈良時代になると、腰帯が使用される。これは男子用ですね。聖徳太子の御画像にある帯。革製で金銀や石の飾りをつけてあったようです。これは正装の時の帯で、略装、平常の場合は織物の帯を用いていたようです。正倉院に遺っている黒、紫、青、紅、黄などの「かんはた」がこれだろうと云われている。

豊臣秀吉が朝鮮出兵のため肥前名護屋に出陣していた頃、朝鮮の捕虜の中に組紐の職人が混じっていて、組紐を献上した。これが名護屋帯と云われて大流行するわけです。細紐ですね、帯というより。

帯が発達するのは江戸も寛永、延宝の頃からです。きものも、徳川時代初期までは、袂のハツが明いておりません。女のきものでも男のどてらと同様に袖がついている。帯の発達で帯巾が広がると、袖がつれる。つれますからハツをほどいて振りがつき、身ハツが明くようになったわけです。

広巾帯が流行するのは、歌舞伎役者の舞台姿からだと言われています。上村吉弥や水木辰之助が広巾の帯を舞台で締めて流行させたのがその元。吉弥結び、水木結び、色々の名前の帯が出来るのです。

現在でも結ばれているお太鼓結びは、文化10年(1813)に、江戸の亀戸天神の太鼓橋が再建された時、芸者さんが結んだ帯の

型を受継いでいるのです。

大正時代の帯は丸帯と腹合帯しかありません。腹合帯は昼夜帯、鯨帯ともいわれた帯。関東大震災後になると、名古屋帯が出回って来る。名古屋の学校の先生が自分用に作ったのを、商売人が目をつけて売り出したと云われています。これはあまり上等な人は締めなかった。一杯飲屋のおねえさんか、すき焼きの店のおねえさんが締める帯が名古屋帯。今だと名古屋帯という側は売ってまず、共で太鼓まで三尺位の返しになってね。出て来た当時は名古屋帯という側はない。片側だけしか売ってませんから、名古屋を作る時は別布を三尺買って貰うのです、お客様に。そうしてお太鼓の裏側に、それを腹合せの部分だけ別布を使う。それで半巾の頭から二尺五寸を中心にして左右に五寸を明けてポケットを付けたのです。かくしを。ということは、今はお金の価値が落ちて1万円札が氾濫していますが、昔はギザ1枚50銭のチップ貰ったら大変なものでした。それをおねえさんたちはちょいちょい貰うため、がま口をいちいち開けて入れられません。そのため昔は名古屋帯には必ずポケットがついていました。

今度の戦争でくると変わると、名古屋帯そのものが新規に生まれる時代になって来たのです。名古屋帯の始まりというのは、簡略化を狙った、ついでに作った帯なのです。それが今日これだけ発達して来た。

今もごく大きな婚礼になりますと、丸帯というものを使います。昔は嫁入りの支度には必ず丸帯を使ったものです。今は袋帯です。袋帯というのはズック（消防に使うホース）の様に全部通しに織ったものです。両端ミシン掛けたのは袋じゃないけれど、両端ミシン掛けたら腹合帯なんだけれど袋帯といって、大手を振っている。本来なら袋帯じゃありません。

日本一の丸帯屋のこと

昭和2年頃、私は日本一の丸帯屋さんに会いました。奥さんの里が丸帯を作る機屋さんだった人で、東京へ来てお屋敷専門の訪問販売を始めた人です。帯の織元ですから、50本も100本も束にして家に積んである。その丸帯を10本位風呂敷に包んで肩にかついで、京都言葉で、素晴らしい丸帯だけを売るので。人絹ではありません。糸錦とか綴とかそんなのばかり10本位持って売わけです。

その人がお昼になると必ず、今の伊勢丹の前に「市むら」というそば屋があってそこに来る。そこで私が一緒になったわけです。私も丁度その時家内がお産で里に帰っていてチョンガーで二階借りしてた時代ですから、毎日一緒になるのです。いつも顔合わせるから「あんた何の商売?」「きものを縫う商売、仕立屋ですよ」「あゝそう、帯もやれる?」「帯なんかへっちゃらですよ、やりますよ」「おゝそれじゃ」ということになったわけです。この人が日本一の丸帯屋になるのです。

一緒になってから毎日のように丸帯の仕立物を持って来る。今日は5本だ、一寸多いと10本だと持ってくるわけです。その内に「中路、どうしても日本一になるには銀座へ出たい、銀座にどこか店探せ」というので、私は銀座中探したけれど良い店がない。現在の歌舞伎座の前、三原橋の角に「大野屋」という足袋屋があります。その隣に住友銀行がある、そこが当時貸ビル四階になっていた。そこへ出て日本一になったわけです。この人は丸帯だけしか売らなかった。「これだけ丸帯が売れるのだから、腹合せや片側帯も売ったら」と云っても「そんなもの売ったら安物だからとそっちをかうだろう、丸帯欲しい人に売るのであればそれで良いのだ」と丸帯を売る。

綴の丸帯など毎日のように出て来る、仕立で。私は和服の畑ですから、帯は専門家じゃない。小僧時代のなじみが、三越出入りの帯屋にいたので、それを引っぱって来て、半分仕事を手伝って貰ったのです。

本綴の帯の縫い方は、差し縫いです。綴というのは燃糸ですから房が下がっています、3寸から5寸位。その房の糸を1本ずつ針に通して、織ったところに戻していくのです。頭から一寸位入ったところで、安全かみそりの刃で切るので。これが出来る人は当時東京には居ません。京都にいました。そこで「井筒」の旦那が「中路どうせ専門でやるのだから、京都へ行って来い、俺が費用出すから」というので、煙をはく汽車に乗って京都へ習いに行った。その本綴のやり方が出来たのは当時東京で私しか居なかった。仕事はこうして苦労して覚えるのですね。

当時、江戸褌の重ねが3円50銭、縫い賃ですね。それが丸帯一本縫うと5円。帝大卒業生が安田銀行へ勤めて、月給27円。一日弟子が丸帯の側をかえし針で縫った側に、私が帯芯を入れて仕上げるのですが、15本縫って60円稼いだわけです。サラリーマンなんてかわいそうだなと思ったものです。それで金が残ったかということ全然残らない。職人ですよ。金が入ると、今夜は天ぶらだなんだとおごってやってチョン。余り利口じゃないけれど、若い時はそれ位の元気があるから仕事も覚えられるし、出来るわけです。

この様にして帯の発達があったわけです。日本一の丸帯屋、井筒機業店の雄谷末次郎さんの話も帯の物語として記録に残るんじゃないかと思ってお話をしました。